

Title	河上肇と中国の政治経済学
Author(s)	三田, 剛史
Citation	中国と日本の政治経済学：河上肇記念シンポジウム報告書 (2005)
Issue Date	2005
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2433/39628">http://hdl.handle.net/2433/39628</a>
Right	
Type	Conference Paper
Textversion	publisher

いただきます。大西広、そして本山美彦、山本裕美の3教授です。

大西教授は本学の社会統計学の担当教授で、最近では中国と日本、あるいはアジア太平洋地域の環太平洋の統計的な分析を精力的になさっていて、中国との交流も広い方です。非常におもしろいご意見を中国の社会主義や、それからかつてのソ連の社会主義についてお持ちなので、今日はそんな話も聞けるのではないかと考えております。

本山教授は本学の国際経済学の担当の教授で、アメリカ流のグローバリゼーションへの歯にきぬを着せない批判で知られる方です。今回のレジュメを拝見しますと、中国の思想の問題まで含めてご発言されるようで、私も楽しみにしております。

最後に山本教授は、農業経済をベースにして中国経済論を研究されておられますが、今回の企画の共催者となっております京都大学上海センターの所長を務められています。このセンターは、京都大学のこれまでのアジアとの関係をベースにしなが、新しいかたちでの研究をしていくということで本学の経済学部<sup>部</sup>に数年前に設置されました。研究・教育、そのほか社会的・経済的活動のための国際的なセンターでございます。

こうした3人の方を学部の側からパネラーとして出して討論をしていきます。

それでは最初に三田先生に20分ぐらいお話をいただきたいと思います。三田先生、どうぞよろしくお願ひします。

三田：三田剛史でございます。私はこの数年、河上肇の思想とその中国への影響、それから中国の思想的伝統と河上肇との関わりということについて勉強しております。本日はこの河上肇<sup>ゆかり</sup>縁の京都大学で報告の機会を与えてくださり、非常に感謝いたしております。どうもありがとうございます。どうぞ、私の報告に対してご叱正とご指導のほどお願ひいたす次第です。

#### 一 河上肇と中国の政治経済学、中国知識人との関わり

河上肇は1879年、現在の山口県岩国市に生まれました。生前の河上肇の活動舞台はほぼ日本に限られ、ヨーロッパ留学の途上で上海と香港に立ち寄った以外、中国を訪れたことはありませんでした。1928年、京都帝国大学経済学部の教授を辞職することを迫られてからは、マルクス・レーニン主義の啓蒙に努め、共産主義革命の実践運動に加わっていましたが、当時の日本の時代状況は河上肇に活動を続けさせることを許さず、1933年に逮捕・投獄され、約4年半に及ぶ獄中生活のあとは隠遁生活を余儀なくされました。第2次世界大戦終結後、河上肇にはもはや活動を再開する余力は残されておらず、1946年1月30日、ここ京都で死去しました。河上肇の学問も実践も未完に終わったといえるでしょう。

しかし、京都大学に留学して河上肇の教えを受け、あるいは河上肇の書物を通じてマルクス主義を学んだ中国の知識人は、彼らの祖国でマルクス主義の中国への適用を模索し、革命運動を繰り広げ、1949年の人民共和国成立にも参加しました。単に河上肇が中国に影

響を与えたというだけではありません。日本は古代以来、中国文化の圧倒的な影響を受けてきましたが、19世紀末以後、近代化のあり方を日本に学び、日本の学問を中国へ輸入するという動きが始まりました。河上肇は中国の古典にも造詣を有し、その強い影響下にあった日本近世の経済思想にも通じていました。河上肇の思想的基底には中国古典を淵源とする伝統というべきものが存在していると思います。そして書物と人を通じた河上肇の学問の中国への伝播は、日本から中国への文化逆流現象の重要な一部をなしています。つまり、河上肇は中国から日本へ、そして日本から中国へという日中両国の学術思想交流史の『環』を一身に体現している人物といえます。

河上肇の著作の、確認されている最も古い中国語訳は1914年の「共同生活と寄生生活」という論文ですが、マルクス主義文献として河上肇の著作が中国で明らかに特別な関心を集めるのは、いわゆる五・四運動期以後のことです。1919年以後、河上肇の個人雑誌『社会問題研究』や京都大学の『経済論叢』などに発表された論文が、発表から時を移さず中国語訳され、『新青年』や『晨报』といった中国の雑誌・新聞に掲載されるようになります。また1920年に『貧乏物語』の中国語訳、『救貧叢談』と『貧乏論』が刊行されますが、貧乏物語以後の河上肇の単行本は『資本主義経済学の史的発展』、『経済学大綱』をはじめほとんど全てが中国語に翻訳されました。

ちなみに辛亥革命から人民共和国成立までの38年間に中国で出版された狭義の経済学書は半数が翻訳書でした。最も多く中国語訳されたのは日本の経済学書で、以下ロシア・ソ連、イギリス、ドイツ、アメリカの文献が続きます。最も多く中国語訳された日本の経済学書の中でも最多の中国語訳を有するのが河上肇の著作です。さらに、当時の日本の社会学者と哲学者全般に広げてみても、河上肇ほどその著作が多く中国語訳された人物はいません。翻訳点数の多少だけでその影響の大きさを論じることは避けなければなりません。翻訳点数の多さはやはりその著者への関心の高さを反映しているはずですが、河上肇の著作の中国語訳は合計約100点が確認されています。河上肇は20世紀前半の中国にとって最も大きな影響力を有しえた社会学者であるといえるでしょう。

河上肇の著作の中国語訳刊行は人民共和国成立後も続き、『社会組織と社会革命に関する若干の考察』、『経済学大綱』などの中国語版が出され、1963年には『自叙伝』も中国語訳されました。河上肇の著作の中国語版のうち最も新しいのは、すでに改革・開放時代にはいった1988年に出版された『資本論入門』です。河上肇の著作を中国語訳した中国の訳者たちは、判明しているかぎりすべて日本留学経験者で、京都大学で直接河上肇に師事したと考えられる人物も含まれます。

報告用紙に河上肇の著作の中国語訳の代表例をあげておきました。例えば日本留学から帰国後、北京大学教授となった陳豹隱は『経済学大綱』を翻訳しました。さらに、河上肇と宮川実共訳の岩波文庫版『資本論』を参照して、初の中国語版『資本論』も出版しました。これらはいずれも献辞をつけて河上肇に謹呈され、今も京都大学経済学部の河上肇文庫に所蔵されています。

河上肇在職当時の京都帝国大学では多くの中国人留学生が学んでおり、少なからぬ中国人留学生が何らかのかたちで河上肇と接触をもっていたはずですが、彼らの中から河上肇に学んだマルクス主義を、いかに中国に適用するかという現実問題に取り組む一群の人物が現れました。

京大留学者が中心となって1922年に上海で創刊された雑誌『孤軍』では、社会主義が中国に適用可能か否か、中国における革命はいかにあるべきか、が議論されていました。判明している主な『孤軍』の論客の経歴を一覧表にまとめてみました。

マルクス経済学による中国経済社会の分析に先鞭をつけた人物の1人に京大経済学部留学して河上肇に学んだ漆樹芬がいます。漆樹芬は1925年に上海で『経済侵略下之中国』を出版し、『社会組織と社会革命に関する若干の考察』などを参照して、マルクス経済学の概説を行うと同時に、帝国主義列強によって経済的に侵略される中国という現状認識を打ち出し、侵略打倒に立ち上がることを呼びかけました。

河上肇を指導教官として大学院にまで進んだ王学文は、中国近代の社会経済に「半植民地半封建」という規定を付与しました。この規定は1938年の毛沢東の論文「中国革命と中国共産党」に採り入れられ、後には中華人民共和国憲法前文にも明記される中国の公式見解となりました。

京都帝国大学の留学生以外でも、資料的検証はまだできていないものの、ほかにも河上肇に接触したとされる中国の知識人革命家がいます。『資本論』中国語訳を完成させた王亜南は日本留学中、河上肇の教えを受けたといわれています。これについては後ほど張小金先生に伺ってみたいところです。『資本論入門』を翻訳した何仲珉は東京で堀江邑一の導きにより河上肇の指導を受けたとされます。また、1921年の中国共産党第1回全国代表大会参加者となった李漢俊や歴史学者何幹之も中国の研究者によって、河上肇と接触があったといわれています。

直接の接触はなかったとしても河上肇の著作から多くの中国の知識人が学んだと考えられます。李大釗は早稲田大学留学から帰国後、北京大学で陳豹隱らと共にマルクス主義研究に従事し、コミンテルンの指導下、中国共産党設立に参加しました。また李大釗は河上肇の論文を下敷きに1919年、「私のマルクス主義観」を発表しました。これは中国における本格的マルクス主義紹介の嚆矢となるものです。

それから周恩来は河上肇に学ぶため京都大学を受験しようとしたとされています。周恩来が書いた、京都帝国大学政治経済科専科への入学願書の下書きとされる文書が天津の周恩来・鄧穎超記念館に展示されています。

河上肇の論文を数多く中国語に翻訳した施存統は1922年1月に日本留学から帰国すると、上海で社会主義青年団の指導者となりました。施存統の指導下からは任弼時や劉少奇が後の中国共産党幹部として育っています。

さらに京都大学の教室で河上肇に学んだ周仏海は後に日本の傀儡政権とされる汪兆銘政権に重鎮として参与しています。大学院まで進み、河上肇の指導を受けた王学文は1937

年以降延安で日本人捕虜を再教育する日本工農学校で教鞭をとりました。文学部の留学生でしたが河上肇の講義を聞いたとされる李初梨は、日本敗戦後の中国東北地域で残留日本人対策を担当していたとされます。それから『社会組織と社会革命に関する若干の考察』を中国語訳した郭沫若は、戦後の日中文化交流政策に大きな役割を果たします。

河上肇の人と学問が、彼らの対日政策・対日思考に影響しているのか否か、私はまだ研究を始めていませんが、河上肇に連なる人脈が戦前から中国の対日政策に関与していたということも指摘しておきたいと思います。

このように河上肇は中国のマルクス主義史、共産主義運動史、ひいては近現代史を語るうえで欠くことのできない人物です。

## 二 日中交流史上の河上肇

では河上肇の思想形成の過程に注意しながら、日中交流史上にどのように位置付けられるのかを考えてみたいと思います。ここで特に、日本の社会科学史と河上肇の関係を考えるにあたっては、経済学史・経済思想史学者の杉原四郎氏と逆井孝仁氏、それから政治学者の石田雄氏の著作を参考にしています。さらに河上肇の中国の古典の読み方を考えるにあたっては、河上肇の親友で京都帝国大学文学部の教授を務めた中国語学者小島祐馬の見解も参照しています。

河上肇が政治家を志して1898年に入学した東京帝国大学法科大学では、臣民を統治するための官学としての国家学が主流として講じられていました。同時に河上肇は貧困、貧富の格差といった社会問題の存在を認識しはじめました。ただ大学生の頃の河上肇は、社会主義そのものにはまだ懐疑的で、社会問題をどのように解決するか？ 社会政策か社会主義か？という当時の経済学界の一般的課題とは別に、大学卒業前後の河上肇が抱えていた思想的課題は、経済と道徳の調和でした。この課題は国家学や社会政策論、人道主義経済学からマルクス・レーニン主義へとその主張を変えていく河上肇が一生かけて追求した問題であったといえます。

1908年、河上肇は京都帝国大学に奉職し、日本は大逆事件を経て大正デモクラシー期に入ります。大正デモクラシーの時期は、新興の市民階級が社会問題追求の担い手として勃興した時期でした。1917年のロシア革命以後は、日本においてもマルクス主義の研究が活発化しますが、マルクス主義経済学は社会問題解決の有効な手段だと思われただけでなく、ドイツとロシアで強い影響力を有する最新の学説であり、日本においても現代の理論として受容すべきものだと考えられたようです。

このような時代背景において河上肇がマルクス主義研究を開始したということから1つの問題が浮かび上がります。イギリスの古典派経済学、いわゆる自由主義経済学は、幕末から明治初年にかけて日本にまず導入された経済学であり、主に私学や実業界によってその影響力が日本においても持続されてきました。しかし、河上肇がイギリス古典派経済学

研究を本格化させるのは、1913年から15年のヨーロッパ留学以後のことでした。しかも河上肇のイギリス古典派経済学研究は、自由主義のイデオロギーを摂取するためではなく、個人主義の行き詰まりとその打開策として誕生するラスキンやマルクスの経済学への、いわば序曲としての史的研究でした。

大正デモクラシー期の河上肇にとって、自由主義経済学はすでに克服すべき過去の経済学であり、時代を切り開く最先端の経済学はマルクス経済学でした。ただ河上肇は自力で文献に依拠してマルクス主義を探究していったのであり、留学してマルクス主義を学んだわけではありません。河上肇のマルクス主義研究は、経済と道徳の調和という青年時代以来の課題追求の延長上にあっただけです。

河上肇は1916年の『貧乏物語』において、マルクスの経済学批判の序文で示された、いわゆる唯物史観の公式を引用しています。ここでの河上肇の引用要旨は、経済組織がまず変わって、しかる後に人の思想精神が変わるというもので、これがそもそも東洋に古くからある経済的社会観であるとしています。河上肇のマルクス主義ないしマルクス・レーニン主義の受容には、東洋に古くからある経済的社会観、いわば中国古典に由来する思想的伝統が媒介しているはずですが、中国の思想的伝統ないしその源流となった中国の古典、特に先秦時期の経済思想の影響を強く受けた徳川期の経済思想を、河上肇は1902年頃から研究していました。河上肇は徳川期経済思想の特徴として、「支那古代ノ学説ヲ尊重セシコト」をあげています。「支那古代ノ学説」とは、「先王之道」であり「堯舜之道」であると述べ、「維新前ニ於ケル奔放ノ経済学説ハ主トシテ其ノ系統ヲ支那ニヒクモノト謂フベキナリ」と断じています。しかし、「支那古代ノ言説ヲ尊重シ崇拜セシコトハコレ亦今更論ズルノ要ナシ」として、その具体的内容には踏み込んでいません。

中国古代の思想を受け継ぐ徳川期の経済思想の1つの大きな特徴を、逆井孝仁氏は、「経済的いとなみの合理性が政治によって、そして究極的には政治そのものを価値付けている道徳的権威によって、その実現が決定づけられる」と表現しています。河上肇のいう支那古代の学説尊重とはこのことであり、道徳秩序を支えるための経済運営であるといえます。河上肇自身が中国古代の学説を幾度となくその著作にひいていることは、河上肇が徳川期の経済思想家の視角を引き継ぎ、先秦経済思想、中国古典の経済思想の観点を無意識ともいえるレベル、つまり客観的疑義検証の必要を感じさせないほどまでに深く抱懐していたことを示しているといえるでしょう。

アメリカの中国学者トーマス・メッツガー氏は、近代西洋の市民社会と中国社会の比較から、中国の思想的伝統として、知識人が道徳的権威による上からの教化により、ユートピア的ゲマインシャフトの理想を社会に現実化しようとする強い傾向があると指摘しています。またメッツガー氏は、中国の知識人はアダム・スミスが志向するような、自由な個人によって構成されるゲゼルシャフトの社会には懐疑的で、中国の知識人にとってそのような社会は道徳的失敗であるとも述べています。

河上肇も自由主義の社会は「個人主義」の社会であり、貧富の格差などの問題をすでに

顕在化させつつある社会で、ラスキンの「人道主義」やマルクスの「社会主義」によって克服されなければならないと認識していました。このような河上肇の社会観には、大学時代に修めた近代的学問が英米流の自由主義を主としたものではなかったこと、思想的伝統が無意識といえるレベルにまで浸透していたことが背景にあると思われます。河上肇は特に、『孟子』の「恒産なくして恒心あるは、<sup>ただ</sup>惟士のみ能くするを為す。」という一節を生涯の著作の中で何度も引用しています。この言葉は、経済の改善を道徳推進の前提とするが、経済が改善されなければ道徳を保てないのは、非支配者である「民」であって、「士」は経済状態の如何にかかわらず道徳を保持できるものであり、しかも経済を改善することで民を善導していくべき存在であるという意味を含んでいます。

河上肇はまた、『論語』の「食を足し、兵を足し、民をしてこれを信ぜしむ」という一句も引用しています。この一句の背後には、「民」のために救貧を行うのも善導を行うのも「士」であるという思想があります。河上肇の思想には、このように経済を道徳の手段とする儒家的教化思想というべきものを有しており、経済的基礎が思想などの上部構造を規定するというマルクスの唯物史観は儒家的教化思想に内包されるものでした。河上肇の生涯にはこのような「士」の思想が貫かれているのではないのでしょうか。

河上肇は『国家と革命』など、レーニンの著作に基づいてロシア革命の研究を進めていくうちに、社会主義革命が3つの時期を経る革命であることに考えたりしました。その3つの時期とは、精神的準備、政治的戦闘、経済的経営の3期であります。そして社会主義革命にも精神的指導者、政治的戦闘すなわち政治革命を主導する先覚者が必要であるということを見いだしました。前衛的主導者の担う革命というレーニンの革命理論は、マルクス主義革命への「士」の参与のあり方を河上肇に気づかせました。河上肇にとって、当時のコミンテルン指導部こそが、この先覚者の集団でした。ここにレーニン理論とロシア革命の現実を媒介として、中国古典に由来する「士」の思想とマルクス主義が、マルクス・レーニン主義のもとに結合されたといえます。さらに河上肇のいう無産者の執権、すなわちプロレタリアート独裁はこの結合の上に成り立つ革命政体であるとの認識に、河上肇は到達しました。河上肇は古代以来の中国から日本への文化的影響と、近代以後の日本から中国への文化逆流という、この日中交流史の環を一身に体現している人物です。中国の思想的伝統を継承する思想家の、マルクス主義者への転化の過程と、このようなマルクス・レーニン主義に対する河上肇の認識は、中国の知識人への共感を呼んだのではないのでしょうか。

先ほど述べましたメッツガー氏の説に従えば、中国の革命家にとっての理想は、ゲマインシャフト的ユートピアの追求であったといえます。河上肇の共産主義観にもゲマインシャフト的ユートピアへの志向があります。それは革命を実行して、生産力の増大という基礎の上に共産主義社会を確立し、『ゴータ綱領批判』で主張されたように、「能力に応じて働き必要に応じて取る社会」が実現されれば、社会のために剰余労働を行うという自覚が生まれ、剰余労働によって消費を社会的に享受するようになるということです。このよう

な考え方は1930年の河上肇の論文「共産主義社会への展望」で暗示されています。

### 三 今後の課題

人道主義者からマルクス主義者へと形容される河上肇の思想的遍歴は、道徳的権威を備えた「士」の主導する社会改革・革命という1点で一貫しています。毛沢東は河上肇の著作からこの一貫性を読み取っていたのではないのでしょうか。1962年訪中した宮川実に対し、毛沢東は河上肇の変革の精神を称え、革命家にして憂国の学者であると評価し、その精神が『貧乏物語』以来一貫しており、河上肇のよい著作は中国語に翻訳して読ませねばならぬと語ったといっています。毛沢東は実際1941年に延安で河上肇の『経済学大綱』序文の中国語訳をプリントして幹部用教材として配付しています。

最後にまとめにはいりたいと思います。河上肇が志向したのは「道徳と経済の調和」ないし「道徳を支えるための経済」であり、河上肇が追求したことを柔らかな言葉で言いなおせば、人間が人間らしく生きるためには、経済社会がいかにあるべきかという問題であったと思います。1930年代の河上肇にとっては、世界戦争の危機をいかに回避するかということも大きな課題でした。ただ、結果的に河上肇のたどり着いた思想は、人間の道徳的向上を目指す理想主義的側面をもつ一方、プロレタリアート独裁に代表されるような権威主義的体制を是認するものでもあり、権威者としての人間の脆さを看過し、社会運営に「民」が主体的に参与する重要性をほとんど考慮していないようなものでした。これは社会科学がいかなる思想に支えられるべきかという問題を、現代にまで投げかけていると思われま

す。

これで私のつたない報告を終わりにさせていただきます。ご叱正のほどよろしく願いいたします。

八木：ありがとうございます。

(拍手)

八木：すぐにご意見を述べられたい方もおられると思いますけれど、もう少しお待ちいただいて、次に張先生のお話をいただくことにします。最初のセッションのおわりで、お2人の報告について簡単なご意見等があれば、それを受けたいと思います。それでは張先生、お願いします。

張：ご来場の皆様、本日の会議に出席できて非常に光栄に存じております。特に大西教授の招聘とご来場の皆様に感謝を申し上げます。私は中国の厦門大学で哲学の研究をしている者ですけれども、主にマルクス主義哲学および中国の近代、現代の問題との関わりにつ